

未経験の伝染病から家畜たちを守ろう

石井敏雄

畜産の近代化に伴い、多頭羽飼育の傾向に向ってきている今日、従来あまり経験しなかった伝染病がすでに発生しているものがあり、又今後発生を予想されるものもある。

これらの伝染病が発生することにより、家畜が全滅するか或いは相当の被害をこうむることがあっては、折角の多頭羽飼育も挫折することになる。

最近県下に養豚、ブロイラー熱が高まってきているので、今回は特に豚、鶏の伝染性病について述べてみよう。

1、鶏のロイコチゾーン病

この伝染性病は北海道を除く各府県で発生をみている。伝染経路はニハトリヌカカといって一耗位の非常に小さい蚊が吸血することによって感染する。

◇発生時期 気象状況、年度。地域などにより、流行の時期に多少のずれがみられるようで、県内では未だ充分調査が行われていないが、6月下旬から8月下旬頃であるといわれている。10月以降になると発生は下火になるよう思われる。多発時期は7月から8月中旬頃である。

◇斃死率 ひなでは、高い場合には70~80%、低い場合には数%というように環境によってかなりの差がある。成鶏及び中びなでは他の病気の混合感染が多いが、ロイコチゾーン病だけで死ぬものもきわめてまれにみられる。

◇症状 きわめて激しいものからほとんど気づかれないほど軽いものまで、非常にはばの広いものである。喀血、出血死を起すもの。貧血、緑色便、衰弱死を起すもの。貧血、緑色便、発育遅延、産卵の減少または停止を起すが、耐過して生きのびるもの。無症状で耐過するもの。各段階のものがみられ、このような差は、鶏の月令、感染時期、場所、ヌカカの数、注入されたスポロゾイトの数などにもよるものと言われている。

◇治療 根本的な治療薬は発見されていないが症状を軽減すると思われるものがある。これらは筋肉内注射又は飼料の中に混合して与えるようになってい

る。

◇予防 ニワトリヌカカの防除は是非必要である。ニワトリヌカカは、鶏糞上をとびまわる微細なさし縄で、夜間は鶏舎の天井、止木等にとまっている。殺虫剤（水溶液）で鶏舎の壁、柱及びバッテリー、ケージの糞受台、乾燥中の鶏糞に散布する。ニワトリヌカカの発生源は未だ不明であるので殺虫剤の経済的な散布場所は不明である。

2、鶏の伝染性気管支炎

日本で知られるようになったのは、昭和25年以降であり、東京都、神奈川県をはじめ関東地区一帯その他の地区に流行している。

◇原因 ヴィルスで呼吸感染である。消化器からの感染も考えられる。潜伏期は大体2日から7日で殆んど前駆症状なしに突然呼吸器に異常をきたす。

◇症状 初生ひな群は無症状で急死するもの、元気がなく、食欲不振、毛つやがなくなり、流涙、鼻汁を流し、ブツブツという肺胞音がきかれ、開口呼吸をする。中びな群は食欲不振となり飼料を食い残す。肺胞音、咳、開口呼吸をする。鼻汁や涙は流さない。

成鶏群は喘鳴音、咳喀出音等の呼吸器症状を呈し、神経症状はみられない。産卵率が低下し、また畸型卵を産むものが多い。

◇斃死率 初生ひな群では発病後10日以内に窒息により60%~10%斃死する。中びな、成鶏群では、滲出物を口から排出し、合併症がなければ殆んど斃死しない。

◇治療 現在有効な治療薬はない。二次的感染を防ぐため抗生物質を使用する。

◇予防 回復鶏が相当長時間の免疫を獲得することから、ワクチンの可能性が考えられているが、まだ有効なものは発見されていない。

3、鶏の白血病

鶏の白血病は、病原体、臨床症状、病理変状は単一のものではないので、鶏白血病群又は鶏白血病症候群という名称が与えられている。近年多発の傾向

岡山畜産便り 1961.08

にあり病性が緩慢で知らず知らずの間に病状が悪化するので、一時に多数の鶏が斃死することはない。発生の実態はまだ詳かでない。病症群は次のように分けられる。

鶏の白血病

◇リンパ腫症 内臓型、神経型、眼型、骨型、骨髄性白血病

◇赤芽性白血病（赤芽球症）骨髄球症

内臓型 米国ではこの病原体はウイルスであると報告されているがまだ認められていない。

◇病状 斃死前1～2ヶ月は全く産卵停止する。産卵が止まって1週間以内に食欲が不振となる。食欲が減退してから数日以内に緑色の下痢便の排泄が始まる。体重は著しく減少し、元気を失う。肝臓部が腫大する。

神経型 一般には鶏の麻痺病とも呼ばれており、ふ化後2～5ヶ月位の若鶏が侵され、集団的に発生する傾向がある。

◇病状 脚、翼、頸等の部位に麻痺がおこる。脚麻痺の初期には指を内方に曲げたり、脚弱の症状が現われる。病勢が進むにつれて脚を前後に伸した特有の姿勢をとるようになる。翼は下垂し、脚にけいれんがあったり、萎縮が見られたりする。歩行は困難となり、うずくまった姿勢をとることが多く、重症になると起立不能となる。

眼型 この型は現今では極めて稀である。ループ、細菌性眼炎、ビタミン欠乏等と混同され易い。

◇症状 健康鶏の虹彩は栗色または橙色であるが、本病では白色に変化する。視力は減退し、さらに重症では失明する。

骨型 この型は足が太くなるのが特徴である。

◇症状 発病初期には足の骨が異常に太くなる。患部を触診すると、温感があつたり固い感じがする。さらに病状が進むと脛骨は特徴のある長靴のような外観を呈する。

骨髄性白血病 赤芽性白血病、リンパ腫症にくらべて発生率は低く、これらによる被害は少ない。この病原体はウイルスである。

◇症状 赤芽球症では貧血が起り、鶏冠は淡黄色となり、眼結膜、口腔粘膜に出血点をみる。血便を出

すこともあり、元気、食慾減退してやせ、又腹水症を起すこともある。

4、豚の伝染性胃腸炎

日本においては昭和31年の暮れから昭和32年にかけて発生がみられ現在では相当範囲に亘っている。

◇原因 ヴィルスで消化器感染である。

◇症状 一時的の発熱が約半数にみられ、下熱後発症する。

その症状は食慾の減退、激烈な灰白色の水様下痢が突然みられ、中には嘔吐するものもある。経過が長くなるにつれて下痢便は黄褐色あるいは黄緑色に変化する、下痢のため渴をおぼえ、体は脱水し、色艶は悪くなりやせてくる。泌乳は停止する。潜伏期は2日～4日のものが最も多く、なお同一豚舎の豚は殆んどが同時に発病するのが特徴である。

◇斃死率 年令によって極めて、まちまちでこれが本病の大きな特徴である。生後1週間以内の哺乳豚は殆ど100%斃死し、3～4週になると40～60%となり、親豚では激烈な症状にもかかわらず斃死するものは殆どない。

◇治療 抗生物質を応用し発病を抑える方法が考えられているが、効果は明らかでない。

◇予防 本病に耐過した豚は免疫ができて、後からヴィルスが入っても発病しないので、予防液については現在研究中である。

豚のトキソプラズマ病

日本においては昭和33年より東京都下に発生し、その後関東、東海地方に続発し、まん延の一途を辿っている。

◇原因 トキソプラズマゴンデーという原虫の感染による。

◇病性 離乳直後の仔豚に集団的に発生することが多く、中豚にも散発し、繁殖用雌豚が死産、流産を起したり、出産後親仔とも発病することがある。人畜共通の伝染性病である。

◇病状 発熱、食慾不振、呼吸困難、耳翼、下腹部、下肢が赤紫色のチアノーゼを呈することが特徴である。その他咳嗽、鼻漏、鼻腔狭窄音、便秘、死流産、失明、てんかん等を起すものがある。

◇治療 サルファダイアジンが原虫の増殖抑制に効

岡山畜産便り 1961.08

果があり、ララプリンを併用すると卓効があるとい
われている。

(県畜産課衛係長。)